

《随筆を書く 文例》

一年 組 番 氏名

」

アフリカの匂い

「あ、アフリカの匂い。」

と友達^{ともだち}が言った。彼女^{かのじよ}はお父さんの仕事の関係で、幼い頃^{こころ}アフリカに住んでいたそうだ。普通に通学路^{つうがくろ}にいて、何がアフリカのおいなのか知らないが、公園で枯れ葉^{かれは}を焼いたような匂いがした。

昨日、家族でお墓参りに出かけたときに、

「おばあちゃんちの匂いにする。」

と弟^{あに}が言った。母と私も、おばあちゃんちの匂いを感じて、まわりを見回した。近くの家^{いへ}の裏庭^{うらにわ}で何か燃やしていて、煙^{けむり}が漂^{ただよ}っていた。これだ。煙がおばあちゃんちを思い出させるのだ。

おばあちゃんでは、よく何か燃やした。いろりや、かまどや、畑^{はたけ}で。さつまいもやねぎもいろりで焼いた。火で焼くと、電子レンジやガスオーブンと違^{ちが}って甘み^{あま}もほくほく感も格別^{かくべつ}だ。匂い^{におい}が一気に^{いっぺん}におばあちゃんと過ごした記憶^{きおく}を鮮明^{せんめい}にした。

アフリカ帰りの友達も煙を「アフリカの匂い」と懐かしんだのだと思う。匂いは記憶をよみがえらせる検索ワード^{けんさくわーど}になっていた。